

生徒の課題解決につながる教諭と養護教諭の情報共有

—ニーズの共通化につながる保健室からの情報発信のあり方—

教職実践専攻・ミドルリーダー養成コース

学籍番号 18GP406 氏名 成田 綾子

1 はじめに

今日の多様化・複雑化する児童生徒が抱える現代的な健康課題については、専門的な視点での対応が必要であり、養護教諭が専門性を生かしつつ中心的な役割を果たすことが期待される。さらに、これらの健康課題に対応する取組は、学校における教育活動全体を通じて行うことが必要であり、学校の全ての教職員が連携して取り組むことが重要である¹⁾。

従来より連携の重要性は言われている。小倉は、「その学校の保健活動の目標や課題が個々の教師の主體的なニーズに沿っているとき、集団のメンバーとしての活動参加が期待される。したがって、教師集団の中の多くの教師がニーズをもっているようなことを課題ないし解決目標とすることが組織活動を盛んにするものになる。そのような共通なニーズが見られない場合には、共通なニーズに転化していくことが必要となる²⁾」と述べている。連携のためには、教員が課題を共有することが必要で、そのためには情報交換をおこない、教諭と養護教諭のニーズを共通化していくことが求められると思う。

これまでの養護教諭経験から、養護教諭がとらえた生徒の情報を担任にうまく伝えられず、生徒の成長につながる関わりになっていない、という不全感を感じることも多くあった。その中でも、担任と養護教諭が「生徒の課題を共有」できていないということが一番の課題と感じていた。教諭と養護教諭が効果的な連携を図るためには、日頃から子どもに関する情報交換を行い、問題にはチームで行動することが重要である。しかし、先行研究では、「生徒のよりよい変容につながる」ような教諭と養護教諭の情報共有のあり方についての研究が少なく、特に担任からの視点は明らかになっていない³⁾。

そこで、本研究では、教諭と養護教諭の情報共有のあり方を担任からの視点を視野に入れた実践研究で明らかにすることを目的とした。本研究の結果は、現在重要と言われている、チーム学校として専門家や専門機関との連携のあり方についても示唆を得ることができるのではないかと考える。

なお、本研究において「実践」とは、児童生徒等の心身の健康の保持増進によって発育・発達の支援を行うために、養護教諭が目的を持って意図的に行う教育活動である「養護実践」を指す⁴⁾。また、「情報交換」を、教諭と養護教諭が生徒のことについて情報をやり取りすること、「ニーズの共通化」を教諭と養護教諭が情報交換を行う中で、生徒の課題や指導目標を共通化していく過程とした。

本研究では第一に、自分の養護実践の振り返りと整理を通して、実践の側面から情報共有における問題の明確化を図った。第二に、学級担任のとらえる養護教諭との情報共有について、インタビュー調査から明らかにした。第三に、前述の二つの質的研究結果と先行研究を活用して、本校教員を対象に、教諭と養護教諭の情報交換に関するアンケート調査を実施した。これらの結果をいかして、教諭と養護教諭のニーズの共通化が図られるような情報交換について実践し、そのあり方を検討したので報告する。

2 平成 30 年度の研究の経過

(1) 自己の養護実践の整理と問題の明確化

①研究方法

- i) 研究対象：これまで養護教諭として勤務した 4 校の高校において、「保健室来室から始まった課題を抱える生徒との関わり」のうち、特に印象に残る 6 事例を取り上げた。6 事例について、残っていた記録を足がかりに振り返りにより想起された内容も加筆して実践記録とした。
- ii) 分析方法：平成 30 年 10 月～12 月の間に、1 回あたり 90 分程度、計 5 回、指導教員と討議をしながら実践を整理した。討議は、生徒の実態、生徒への対応、生徒の反応、印象深いエピソード、学級担任等との連携を中心とし、実践のどの部分に不全感を感じているのか、またどのような情報交換が良い結果を生んだのかを整理した。討議内容は記録して整理した。

②結果

表 1 に示すように、自分がうまくいったと思う事例では、情報交換から担任と生徒の課題を共有化することができ、連携して取り組むことにつながっていた。しかし、不全感を感じる事例においては、担任と養護教諭が「生徒の課題を共有」できていないため、生徒の変容につながる関わりができなかったということが共通していた。

表 1 実践の整理と問題の明確化(一部抜粋)

実践の概要	●不全感を感じた部分 ○うまくいったと思う部分
過呼吸で頻繁に倒れる 1 年女子生徒の事例。自分自身を受容することができていないという課題を持っていたが、過呼吸という表面的な課題しか共有できず、本当の困り感について担任に理解してもらうことができなかった。	●担任と問題の本質を共有できなかったこと
親が病気になった 1 年男子生徒の事例。親のことが心配で学校生活に支障をきたすようになったが、担任に生徒の本当の気持ちを伝えられず、授業に出席してほしい担任と生徒の気持ちのずれ違いが生じた。	●担任に生徒の本当の気持ちを伝えることができなかったこと
部活引退後、急にやる気を失い、授業を欠席するようになった 3 年男子生徒の事例。表面に現れている現象だけでなく、その生徒に必要な援助について担任と共有し、学年全体で見守ることで自然と授業に復帰できた。	○怠惰ではなく、休ませる必要があるということを担任と共有できた
体調不良を繰り返し、授業に出ることができなくなった 2 年女子生徒の事例。部活での人間関係が原因ということを担任と共有でき、担任と協力して支えることで、生徒の自己決定を促し、生徒自らが問題を解決することにつながった。	○日頃から担任と情報交換を行い、生徒の課題を共有できていたこと

③考察

養護活動(実践)の質は子どもがどのように変容したかに左右される⁵⁾。自分が、「生徒の課題を担任と共有できないこと」に不全感を感じていた理由は、生徒の課題が共有されないために、担任との連携が図れず、生徒の変容につながる関わりがなされなかったためと考えられた。小林は、実践を振り返ることは、養護教諭自身が自己の行為の背景を再認識し、自己の考えとその考えに裏付けされた行為の判断の根拠を自覚化する過程であり、実践者の思考や判断が言語化され再構成されていくプロセス⁶⁾と述べている。また、外在者がインタビューすることで実践が対象化され可視できるようになり省察が深まるとしている。今回、このプロセスを踏むことで、自身の課題が明確になったと考える。

(2) 学級担任がこれまでの経験からとらえる養護教諭との情報共有

①研究方法

- i) 研究対象：本校において平成 29 年度に学級担任をしていた 20 代から 50 代の教諭のうち、協力を得ることのできた 5 名。
- ii) 方法：これまでの教職経験から、対象者が養護教諭と連携して生徒の課題解決を行ったと認識する事例について、事例の概要、養護教諭と情報交換した内容、情報交換で良かったと思うこと、もっと知りたかった情報、その他どのように感じたかについて半構成的インタビューを行った。調査期間は平成 30 年 9 月 11 日から 13 日で、一人当たりの所有時間は 30～50 分、研究目的等を説明の上、承諾を得て IC レコーダーに録音し、逐語録を作成した(表 2-A)。

iii) 分析：逐語録より、養護教諭と情報交換した内容で役立ったことや、もっと知りたかった情報について語られた部分を抽出し、内容が分かりにくい部分は補足説明を入れ、要約した（表2-B）。さらに、内容の同質性でまとめ、カテゴリー名を付けた（表2-C）。

表2 学級担任へのインタビュー内容の分析(一部抜粋)

A：逐語録 (○対象者 ▲面接者)	B：要約	C:情報交換の効果
<p>○そうですね。多分、私もその医療機関と連携ってこと自体がわからなかったの。ああ、そっか、一人で全部って思わなくてもいいんだって。外部の機関を頼るっていう方法もあるのか、とか。あそこまで行くと、外と連携しなきゃいけないんだっていうのが気づきだったかなって。 ▲あー、うんうん。 ○全部学校でやってあげるっていうわけでもないんだな、っていうのは気づきでしたかね。</p>	<p>一人で全部解決しなくていい、外部機関（医療機関）を頼る方法もあるんだということに気づいた。そういうことは、担任は意外と知るチャンスはないと思った。</p>	<p>担任が全部を抱えなくてもいいと思えたこと</p>
<p>○うん。うーん。でも、結構、保健室に相談するっていうことがスムーズにこう、できてるので。クラスでちょこっとしたことがあって、気になることもすぐ言えてたから。そこから、いろんなつながっていく部分が見えてて、自分から教頭に言うってところがうまくいかないときは言ってもらったりとか、うん、そこはありがたかったな。担任が全部抱えなくていいっていう。 ▲ね、ほんとうにそれですよ。え。 ○うん。こっちはあっちもそっちも、ってできないしって思っ。そういう上の方との、こう、つながりつけてくれるってのは、なかなかね。</p>	<p>クラスでの些細なことや、気になることも保健室に相談でき、そこから、つながる部分が見えた。担任から教頭に話づらい場合は、養護教諭に言ってもらったことはありがたかった。担任が全部を抱えなくていいと思った。</p>	<p>担任が全部を抱えなくてもいいと思えたこと</p>

②結果

担任が、養護教諭と情報交換をして役立ったと思うことについては16項目が抽出され、9のカテゴリーに整理された。養護教諭に要望する情報は、5のカテゴリーに整理された（表3）。

表3 学級担任が感じる情報交換の効果と要望する情報

担任が感じる情報交換の効果	担任が養護教諭に要望する情報
<p>①担任が全部を抱えなくてもいいと思えたこと（表2-C） ②生徒の本音を聞くことができたこと ③担任が知らない生徒の一面を知ることができたこと ④生徒のイメージが良い方へ変わったこと ⑤気になったことをすぐに相談することができたこと ⑥情報を関係職員や管理職につなげてくれたこと ⑦生徒への対応のヒントをもらうことができたこと ⑧生徒の些細なことについて吐き出す場となったこと ⑨扱いの難しい生徒の家族や成育歴を知ることができたこと</p>	<p>①担任に弱音を吐くことのできない生徒の話聞いてほしい ②担任からみて異性の話は聞きづらいので、聞いてほしい ③担任には話にくい内容を聞いてほしい ④担任が知る必要のある情報について、養護教諭が知っていたら教えてほしい ⑤養護教諭と一緒に考えたり、時間を共有したい</p>

(3) 教諭と養護教諭の情報交換に関する実態調査(事前調査)

実践を行うにあたり、教諭と養護教諭の情報交換に関する実態を知るため、情報交換に関する実態調査(事前調査)を実施した。

① 調査方法

- i) 調査対象：本校教諭及び講師46名。回収率95.7%(44名)、有効回答率100%(44名)。
- ii) 方法：担任への聞き取り調査で得た内容(表3)等を活用し、調査項目を作成し、間接配布法により実施した。調査期間は平成31年1月15日から21日とした。情報交換についての意識を問う14項目では「そう思う(5点)」から「そう思わない(1点)」、情報交換の経験を問う19項目では「非常によくある(5点)」から「全くない(1点)」の5件法で問い、平均値を算出した。
- iii) 分析方法：統計ソフトSPSS for Windows 25.0を用い、単純集計、平均値の算出、t検定を行った。

②結果(表4-1, 4-2, 表5)

情報交換の意識については、「多面的に生徒を理解することは大切」「生徒の課題や対応の方法を知りたい」等の平均点は高く、4.5以上だった。また、情報交換の経験については、「保健室からの情報によって生徒のイメージが変わった」「保健室からの情報を得て生徒に対応した」の平均点は3.5以下だった。教職経験年数1~10年目の教諭と11年目以降の教諭の平均点の差についてt検定を行った結果、経験を問う5項目で11年目以上が有意に高かった。意識の項目については、経験年数による有意差はみられなかった。

表4-1 情報交換についての意識（一部抜粋）

情報交換についての意識 (n=44) (5:そう思う 4:まあそう思う 3:どちらとも言えない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない)	平均点
○学校内で生徒の対応について共有する場が整っていると思う	3.3
○養護教諭がとらえる生徒の課題について知りたい	4.4
○生徒の課題や対応の方法について知りたい	4.5
○他の教員からの情報を得るなど、多面的に生徒を理解することは大切だと思う	4.8

表4-2 情報交換についての経験（一部抜粋）

情報交換についての経験 (n=44) (5:非常によくある 4:よくある 3:時々ある 2:あまりない 1:全くない)	平均点
○保健室からの情報によって生徒のイメージが変わったという経験	3.3
○養護教諭と情報交換することで、それまでとは違う方法で生徒への対応を試みた経験	3.4
○対応に苦慮する生徒について、保健室から専門的な情報を得ることができた経験	3.5

表5 教諭が養護教諭に求めている情報（自由記述、一部抜粋）

○担任に言えない弱音や悩み	○保健室での生徒の過ごし方	○家庭環境や成育歴
○友人関係	○保健室での対応	○保健室利用の本当の理由
○過去の事例	○持病のこと	○生徒の本音 等

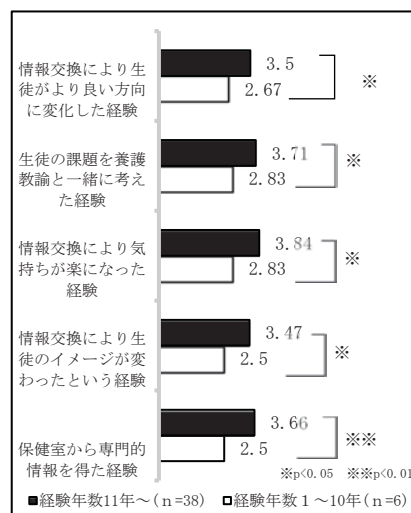


図1 養護教諭との情報交換の経験（一部抜粋）

③考察

「多面的に生徒を理解することは重要」「生徒の課題や対応方法を知りたい」と思っている教諭が多いものの、実際は、必要な情報を、保健室から十分に得る機会が少ないのではないかと推測された。特に、10年目までの教諭は、養護教諭と情報交換する経験が不足しており、養護教諭から積極的に情報交換を行う必要性が示唆された。

3 令和1年度の実践と研究的取り組み

平成30年度に実施した、教諭と養護教諭の情報交換の課題の明確化、教諭と養護教諭の情報共有に関するインタビュー調査、アンケート調査及び先行研究より、「情報共有により、教諭と養護教諭のニーズを共通化していくことで生徒の課題が共有され、生徒のより良い変容につながるのではないか」という仮説を立てた。

(1) 教諭と養護教諭の情報交換の工夫

情報交換はコミュニケーションを通して行われる。コミュニケーションには、単なる情報のやり取りだけではなく、感情のやり取りも含まれている。教諭と養護教諭の情報交換では、①生徒の情報をやり取りする、②養護教諭の生徒観を伝える、③教諭と感情のやり取りをすることが考えられる。そこで、仮説を具現化するための情報交換の工夫として、以下について意図的に取り入れた実践を行うこととした。

表6 情報交換の工夫

情報交換の工夫	取り入れた理由
ア：担任等が困っている事を聞く	連携を成立させる要因に、困った時もその場で話せるという学校全体の協力的な人間関係がある ⁷⁾ 。
イ：授業担当者から生徒の授業中の様子を聞く	養護教諭にはわからない授業中の様子を教諭から聞くというプロセスが、連携の基盤となる教諭と養護教諭の関係構築につながると考えた。
ウ：生徒の本音や感情をありのまま伝える	アンケート調査より、教諭は生徒の本音を知りたいと思っている。生徒理解を深めるためには、生徒の内面に対する共感的理解が必要である。
エ：生徒の良いところや感性を伝える	他者から自身の行動や存在を認められることで、生徒の自己有用感が高まる ⁸⁾ 。楽しい、幸せ、感動を感じることができる力が、人間が生きていく上で重要。生徒が何が好きで、何に興味を持ち、どんなことに喜びを感じるのかを知ることで、生徒の課題解決のリソースを教諭とともに探り、課題解決へ導くことにつながるのではないかと。
オ：生徒の言動に意味づけをし、養護教諭の生徒観を伝える	教諭と養護教諭では、感じる生徒の健康課題に差異がある ⁹⁾ 。養護教諭の生徒観を伝えることで、差異を埋めることにつながるのではないかと。

カ：教諭と養護教諭が感情を共有する	感情に伴う記憶は最後まで残る ¹⁰⁾ 。良い感情を共有することで、情報交換することに心地よさを感じ、次からも情報交換しよう、連携しようという気持ちになるのではないか。情報交換の経験が少なかったり、抵抗感を持つ教諭が良い感情を持つことは、継続的な情報交換に有用ではないか。
キ：養護教諭が自己開示する	「わからない」が言えることが連携の第一歩 ¹¹⁾ 。自己開示の返報性の原理 ¹²⁾ より養護教諭が自己開示することで、教諭も「わからない」と言いやすくなるのではないか。

(2) 実践と記録分析

前述の表6アからキの内容を取り入れ実践を行い、分析を行った。

- ①対象者：保健室を何らかの症状を訴え利用した生徒（以下、来室生徒と記す）の担任及び部活動顧問や授業担当者（以下、担任等と記す）。
- ②実施期間：平成31年4月8日から、令和元年10月31日までの学校日112日間。
- ③方法：来室生徒について、担任等と情報交換を行ったものを一件ごとに記録した。記録は自作の記録用紙を使用した。内容は表7に示した。

表7 担任等との情報交換の記録内容

保健室での対応について	担任等との情報交換について
・月日 ・学籍番号 ・性別 ・原因 ・感情 ・好きなこと（感性） ・本音 ・生徒の良い面 ・保健室での対応、理由 ・保健室での過ごし方 ・生徒の変容	・誰と、いつ、どこで、どのくらい（時間）情報交換を行ったか ・情報交換で意識的に行った内容 困っていることを聞く 感情の共有 生徒の良い面、感性を伝える 事実の意味づけして伝える 授業中の様子を聞く 自己開示

④分析対象となる記録数：4月8日から10月31日までの来室者数は延べ1471名、うち記録することができたものは137件であった。

⑤分析

- i) 表7をもとに、データベースとして整理し、137件に固有番号（通し番号）を付した。
- ii) 137件について、A：事例No.（通し番号）、B：月日、C：事例の概要、D：情報交換の相手、E：情報交換に意図的に取り入れた内容、F：養護教諭の思考、G：情報交換の様子（何をどのように伝えたのか）、H：情報交換の相手（担任等）の反応、I：生徒の反応（その場での反応や、後日の反応）、J：研究仮説とどのように関わってくるかの解釈、K：意味づけの11項目で整理した（表8）。
- iii) 表8をもとに、E：意図的に取り入れた内容、J：仮説にどのように関わるのかの解釈と、K：意味づけの三点に着目し、E：意図的に取り入れた内容の同質性で整理した（表9）。
- iv) E：意図的に取り入れた内容は、一事例で複数の場合もあるが、取り入れた内容全てを含め整理した。K：意味づけを整理して、内容の同質性でまとめた（表10、表11）。

表8 情報交換の分析1（一部抜粋）

A:No.	B:月日	C:概要	D:情報交換の相手	E:意図的に取り入れた内容	F:養護教諭の思考	G:情報交換の様子	H:相手の反応	I:生徒の反応	J:研究仮説とどのように関わってくるかの解釈	K:意味づけ
15	○/○	□年女子 風邪症状で来室。部活の練習が厳しく、疲れている様子。バイタルサインは正常だが、表情は暗く、ぐったりしている。「本当はしんどくて帰りたいけど、部活を休むことはできない」と話す。	担任	本音・感情を伝える	いっぱいいっぱいな状況。精神的にも切れてしまっそう。今日は早退した方がいっだろ	疲れがたまっているようだ。部活でのストレスもビークかもしれない。熱なく、早退するほどでもないが、本人は限界を感じている。今日はゆっくり休み、明日からまた頑張った方がいいと思う。	自分もそう思っていた。つらさの内容も大体見当がつく。今日は帰りました。	担任が帰って良いと言ってくれたことで、ほっとした表情をしていた。次の日登校し、部活にも参加した。	生徒の本音・感情を伝えたことで、生徒に対する見立が同じであることがわかった。養護教諭が早退を促すより、担任が本人のつらさに理解を示し早退を勧めた方が、生徒本人にとっては安心できることだと感じた。担任から生徒へのアプローチを助けることにつながった	生徒への関わりを促すことにつながる。

表9 情報交換の分析2 (一部抜粋)

No.	E:意図的に取り入れた内容	J:研究仮説とどのように関わってくるのかの解釈	K:意味づけ
6	生徒の良い所や感性を伝える (エ)	部活動の顧問と情報交換。養護教諭が良いと思った部分を、顧問も同様に感じていた。養護教諭が生徒の良さを顧問に伝えることで、さらに顧問がその内容を生徒へ伝える様子が見られた。生徒は顧問から認められることで、自己肯定感が増すように見受けられた。生徒の良い所を伝えたことで、顧問から生徒への言葉がけを引き出すことにつながったのではないかと。	担任等の生徒への言葉がけを促すことにつながる。
17	生徒の良い所や感性を伝える (エ)	風邪症状で来室した生徒。「放課後のアルバイトがあるから、早退はできない」と訴える。今まで自分のことを主張する姿を見たことがなかったので嬉しく、そのことを担任に伝えた所、「この生徒が2年間で一番成長した生徒だと思う」と言われた。担任は、生徒本人に成長や頑張りを認める声掛けをし、「休むことも社会人としての責任の果たし方だ」と論じたところ、生徒は納得していた。成長を認められることで、生徒の信頼が増し、担任のアドバイスも心に響いたのではないかと。担任が生徒にアプローチするのを助けることにつながった。	担任等の生徒への関わりを促すことにつながる。
21	生徒の良い所や感性を伝える (エ)	倦怠感で来室した生徒。今まで自分から保健室に来ることができなかったが、「今回自分の意思で保健室に来ることができたのは良かった」と担任に伝えた。情報交換後、担任が本人の辛さを認め、「辛い時には保健室に行っても良い」と伝えた。信頼している担任から、困った時は自分の意志で保健室を利用してもいいと言われてもらったことは、生徒にとってとても大きいことだと思っただ。	担任等の生徒への声掛けを促すことにつながる。
44	生徒の良い所や感性を伝える (エ)	風邪症状で来室した生徒。この後の集会で、代表として発表することになっており、「責任があるので、何とか出席したい」と訴える。本来であれば保健室で休養させたいが、「本人は責任を果たしたいと思っている」と担任に伝えた。担任は本人に、「責任を果たしたいと思うことは立派」と伝え、発表が終わったらすぐに退出できるように手はずを整えてくれた。生徒は発表を終え、満足そうな様子で戻ってきた。生徒にとって、担任に理解してもらえるとすることは、大きな力になるのだと思っただ。	担任等の生徒への関わりを促すことにつながる。
51	生徒の良い所や感性を伝える (エ)	イライラしていて保健室に来た生徒。「友だちに八つ当たりしてしまった」とうろたえていた。「友達を傷つけたことを気に病むという繊細な一面を持つ」と担任に伝えたところ、「あの子にもそんなところがあるんだ。いつも自分勝手に動くばかりだと思っていた」と言い、驚いていた。情報交換によって、担任が知らない生徒の一面を知ることにつながったのではないかと。	担任等の生徒理解につながる
41	感情をありのままに伝える (ウ)	体育の途中で気分が悪くなり来室。話しているうちに治まったが、「最近眠れない、食べれない。少しのことでイライラする。学校でもずっと腹が立ってイライラしている。進路は決まったが、本当は他に行きたいところがあり、誰にも相談できずに困っている」と話す。担任には、「毎日感情を抑えられずにイライラしていることと、その原因は進路のことらしい」と伝えた所、「進路は決定だと思って安心していた。生徒にもそのように接していたから、言い出しにくかったかもしれない」と言い、後日面談をし、生徒の気持ちを聞いていた。	担任等の生徒への声掛け(関わり)を促すことにつながる。
13	自己開示 (キ)	登校中に転倒した生徒。すぐに来室せずに、授業中に来室した。ケガは軽微で、授業中にわざわざ来るようなケガではなかった。「なぜわざわざ授業中に来るのかよくわからない。気になった」と担任に伝えたところ、担任も、「今一番気になっている生徒」と言った。気になる生徒だということ共有できたため、次からは同じ視点で情報交換を行うことができそうだと感じた。	お互い気になっていることが共有できたので、連携のきっかけとなる。
33	自己開示 (キ)	頭痛で来室した生徒。「授業には行けない」と訴えるが、さほど具合も悪そうでもない。担任に、「保健室に来た理由がわからなかった。うまく対応できなかった」と伝えたところ、クラスで浮いている生徒だということを教えてくれた。養護教諭がわからないと自己開示することで、担任から生徒の情報を得ることができ、養護教諭の生徒理解が深まった。	養護教諭の生徒理解が深まる。
38	自己開示 (キ)	風邪症状で来室した生徒。症状はそれほどひどくなく、「なぜ保健室に来たのか分からない」と担任に伝えた。担任からは、「もしかしら何かを相談したかったのかもしれない。部活以外でも何か理由があるかもしれない、気をつけて見ていきたい」と思っていた生徒」と言われた。情報交換によって、養護教諭の生徒の見方が担任からの情報によって変わり、注意して見ていかなければならない生徒だということ、共有することができた。	お互い気になっていることが共有できたので、連携のきっかけとなる。
57	事実に意味づけして伝える (オ)	「もう帰る！」と怒って来室した生徒。「教員から誤解され、悔しい。担任にはちゃんとわかってほしい」と訴える。生徒が精神的に不安定だと、担任はここまで踏み込んでいいのか躊躇したが、「担任にわかってほしいと思っている」と伝えた。その後、担任は本人の悔しさを受け止める声掛けをし、誤解を解く手助けをすることを約束した。本人は怒りが収まり安心した表情をみせ、次の日は、普段通りに授業に出席することができた。	生徒への声掛けを促すことにつながる。
35	授業中(部活)の様子を聞く (イ)	家族のことで精神的に不安定になった生徒。本音は部活動顧問に相談したいが、相談して同情されるのが嫌で、部活では強気にふるまっている。相談したいと思っていることを顧問に伝え、部活中の様子を聞いたところ、「心配していた。部活では一生懸命やっていて、周りには見せないようにしているつもりだろうが、何かあったとすぐにわかる。でも、そこまで思い詰めているとは思わなかった。」と言い、本人と面談をした。顧問は生徒のことを気にしているものの、なかなか話すタイミングがなかったが、情報交換することで、それを後押しすることができた。	生徒への関わりを促すことにつながる。
25	感情の共有 (カ)	頭痛で来室した生徒。「昨日は趣味の大会に一日中行っていて、宿題も間に合わないのでもほとんど徹夜で学校に来たが、具合が悪い」と堂々と話す。今までも、自分がやりたいことだけをやっただけで、体調が悪くなることを繰り返しており、担任や養護教諭の話がなかなか通じない。保健室で対応しているうちに、話が通じないことに養護教諭が苛立ち、担任に「今日も話がかみ合わないよ。本当はだめなことだけど、イライラしてしまっただ」と話すと、担任も「わかる。そういうことあるよ。何を言っても通じないことあるよね。うちのクラス、そういう生徒多くて。でもそういう生徒多いから、この生徒も浮かなくて済んでるのかもしれないね」と話した。	生徒の見方が変わった。養護教諭の気持ちが楽になった

⑥結果

情報交換に意図的に取り入れた内容で、「生徒の良い所や感性を伝える」が最も多く、次いで「生徒の言動に意味づけをし、養護教諭の生徒観を伝える」「養護教諭が自己開示する」の順となった(表10)。意味づけについては6点に整理され、「担任等の生徒への声掛け(関わり)を促すことにつながる」が最も多く、「担任の生徒理解が深まる」「連携のきっかけとなる」が次いで多かった(表11)。

さらに、「生徒の良いところや感性を伝える」に注目し整理したところ、「担任等の生徒への声掛け（関わり）を促すことにつながる」ケースが18件あった。「生徒の言動に意味づけをし、養護教諭の生徒観を伝える」では、「担任の生徒への声掛け（関わり）をうながすことにつながる」が13件。「養護教諭が自己開示する」では、「養護教諭の生徒理解が深まる」が7件、「連携のきっかけとなる」が5件であった。印象に残った事例を整理し、図2に示す。

表10 情報交換の工夫

情報交換に意図的に取り入れた内容（重複あり）	件
担任等が困っていることを聞く	2
授業担当者から生徒の授業中の様子を聞く	10
生徒の本音や感情をありのまま伝える	10
生徒の良い所や感性を伝える	52
担任等と養護教諭が感情を共有する	20
生徒の言動に意味づけし、養護教諭の生徒観を伝える	44
養護教諭が自己開示する	20

表11 意味づけの整理

意味づけ	件
担任等の生徒理解が深まる	23
養護教諭の生徒理解が深まる	13
連携のきっかけとなる	18
生徒の課題を共有する	8
担任等の生徒への声掛け（関わり）を促すことにつながる	30
対応に苦慮する生徒への対応方法を理解するきっかけとなる	8
意味づけできなかったもの、その他	37

(計137)

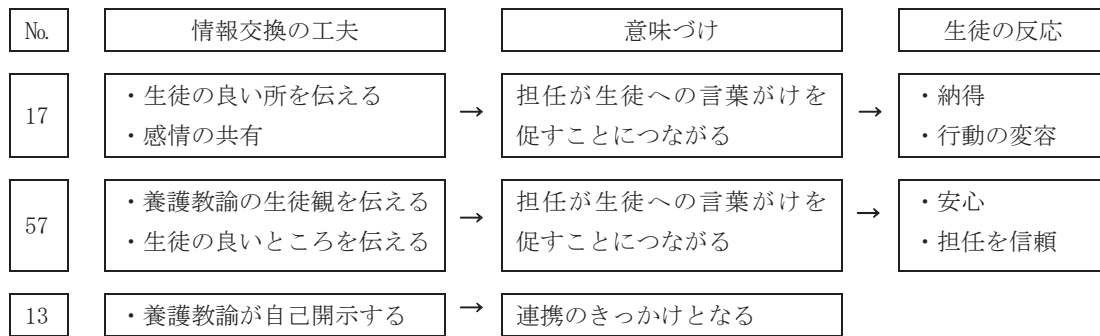


図2 印象に残った事例

(2) 教諭と養護教諭の情報交換に関する実態調査（事後調査）

実践後、情報交換の意識と経験はどのように変化したのかをみるために、事後調査を実施した。

①調査方法

- i) 調査対象：本校教諭及び講師45名。回収率88.9%(40名)、有効回答率100%(40名)。
- ii) 方法：事前調査と同様のアンケート調査を、直接配付法により実施した。内容には、4月からこれまでの養護教諭との情報交換についての自由記述欄を追加した。調査期間は令和元年12月24日から令和2年1月10日とした。情報交換についての意識を問う14項目では「そう思う(5点)」から「そう思わない(1点)」、情報交換の経験を問う19項目では「非常によくある(5点)」から「全くない(1点)」の5件法で問い、平均値を算出し、事前（平成30年1月実施）と事後（令和2年1月実施）で比較した。
- iii) 分析方法：統計ソフトSPSS for Windows 25.0を用い、単純集計、平均値の算出、t検定を行った。

②結果

平成31年1月に実施した事前調査と令和2年1月に実施した事後調査において、平均点を比較したところ、すべての項目で同じもしくは事後調査の方が高い値となった(表12)。31名について対応のあるt検定を行ったところ、有意差はみられなかった。

「多面的に生徒を理解することは大切」「養護教諭がとらえる生徒の課題について知りたい」「生徒の課題や対応方法を知りたい」「養護教諭と情報交換したことで、生徒はより良い方向に変化すると思う」について、4.5以上の値となった。一方、「養護教諭と情報交換することで、それまでとは違ったやり方で生徒への対応を試みた経験がある」、「生徒の対応に困ったとき、他の教員に助けを求めることができる」については事前・事後調査ともに低い値となった。

養護教諭と情報交換をしてよかったことでは、「生徒の悩みや本音を知ることができた」「生徒への対応の仕方を知ることができた」「生徒への対応方法を養護教諭と一緒に考え工夫した」「養護教諭と担任が同じ考えをもって生徒に接することができた」「生徒理解が深まった」等があげられた。養護教諭と情報交換をする上で困難を感じた点としては、「保健室には常に生徒がいるため、保健室での情報交換ができなかったこと」を多くの教員が挙げた（表13）。

表12 情報交換についての事前・事後の項目と平均点

(点)

情報交換についての経験 (5:そう思う 4:まあそう思う 3:どちらとも言えない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない) 情報交換についての意識 (5:そう思う 4:まあそう思う 3:どちらとも言えない 2:あまりそう思わない 1:そう思わない)	事前 調査 n=44	経験年数		事後 調査 n=40	経験年数		前後 比較
		1~10 年目 n=6	11年 目~ n=38		1~10 年目 n=6	11年 目~ n=34	
生徒理解 養護教諭とのかかわりから、生徒の本音を知ることができたという経験がある。 最近の生徒は理解するのが難しいと感じることがある。 保健室からの情報によって、生徒のイメージが変わった(良い方に变化した)という経験がある。 保健室より提供される情報から、自分が知らない生徒の一面を知ることができたという経験がある。 他の教員からの情報を得るなどして、多面的に生徒を理解することは大切だと思う。 どちらかという自分とは、生徒の良い面を見つけることができる方だと思う。	4.0	3.5	4.0	4.1	3.2	4.3	↑
	3.7	3.5	3.7	3.9	3.3	3.9	↑
	3.3	2.5	3.5	3.5	2.5	3.6	↑
	3.7	3.2	3.8	3.9	3.7	3.9	↑
	4.8	5.0	4.8	4.8	5.0	4.8	→
	3.7	4.2	3.7	3.9	4.5	3.7	↑
ニーズの共通化 養護教諭と情報交換をすることで、それまでとは違うやり方で生徒への対応を試みた経験がある。 生徒の課題や対応の方法を、養護教諭と一緒に考えたという経験がある。 担任に弱音を吐けない生徒の話を、養護教諭に聞いてほしい。 対応に苦慮する生徒へのかかわり方について、養護教諭と一緒に考えたい。 養護教諭がとらえる生徒の課題について、知りたいと思う。 担任がとらえた生徒の課題と、養護教諭が捉える課題に違いを感じることもある。※	3.4	2.7	3.5	3.4	3.2	3.5	→
	3.6	2.8	3.7	3.7	3.0	3.8	↑
	4.3	3.5	4.5	4.4	4.3	4.4	↑
	4.2	3.8	4.3	4.4	4.5	4.4	↑
	4.4	4.3	4.4	4.5	4.5	4.5	↑
	3.3	3.0	3.4	3.5	3.3	3.5	↑
き連携の つかけ 「この生徒のこんなところが理解できない」といったことを、他の教員に話すことができる。 あなたから、気になる生徒のことについて、その生徒の担任に情報提供することができる。 生徒の対応に困った時、自分は他の教員に助けを求めると思う。 本校は、教員同士が情報交換できる環境が整っていると思う。	4.0	3.7	4.0	4.2	4.2	4.2	↑
	3.6	3.3	3.7	3.9	3.7	3.9	↑
	3.8	3.5	3.8	3.8	3.7	3.8	→
	3.4	3.0	3.4	3.5	3.3	3.5	↑
知対応の 手立てを 日頃、生徒への対応方法について悩むことがある。 対応に苦慮する生徒について、保健室から専門的な情報を得ることができた経験がある。 生徒の課題や対応の方法を、他の教員と一緒に考えたという経験がある。 生徒の課題や対応の方法について知りたい。 生徒の課題や対応の方法を、他の教員と一緒に考えたい。 学校内で生徒への対応を共有する場が整っている	3.4	3.3	3.4	3.6	3.3	3.6	↑
	3.5	2.5	3.7	3.6	2.5	3.8	↑
	3.6	3.5	3.7	3.7	3.2	3.8	↑
	4.5	4.7	4.4	4.6	4.7	4.6	↑
	4.3	4.2	4.3	4.3	4.5	4.2	↑
	3.3	2.8	3.3	3.6	3.2	3.6	↑
変生徒 容の 変 養護教諭と情報交換したことを生かし対応することで、生徒がより良い方向に変化した経験がある。 養護教諭と情報交換したことを生かし対応することで、生徒がより良い方向に変化すると思う。	3.4	2.7	3.5	3.7	2.8	3.9	↑
	4.3	4.2	4.3	4.5	4.3	4.5	↑
負担 担任 軽減 生徒の対応に困ったとき、他の教員に話を聞いてもらえると気持ちが楽になる。 養護教諭と情報交換したことによって、気持ちが楽になった経験がある。 養護教諭とのかかわりから、自分(担任)が生徒の課題を全部抱えずともいいと感じた経験がある。 学級の生徒のことは、学級担任が解決したほうがいいと思う。※	3.7	3.5	3.8	3.9	3.8	3.9	↑
	3.7	2.8	3.8	3.9	3.2	4.1	↑
	3.6	3.3	3.7	3.7	3.0	3.8	↑
	3.5	4.2	3.4	3.6	4.2	3.5	↑
その他 あなたは日頃、生徒のことについて養護教諭と情報をやり取り(情報交換)してきましたか？ 養護教諭と情報をやり取りして、うまくいったという経験がある。 生徒のことについて、養護教諭と情報交換をしたと思ったことがある。 保健室から出される情報は、生徒を理解するためには不足だと感じることもある。※ 生徒についての必要な情報は、保健室からきちんと得られていると思う。	4.0	3.3	4.1	4.1	3.3	4.2	↑
	3.9	3.7	4.0	4.1	3.2	4.3	↑
	4.1	4.0	4.1	4.3	3.8	4.4	↑
	3.5	3.3	3.6	3.8	3.8	3.8	↑
	3.8	3.3	3.8	4.2	3.8	4.2	↑

※逆転項目

表13 事後調査 自由記述

情報交換したい内容	○支援が必要な生徒への関わり方 ○生徒の悩みや本音 ○保健室での生徒の様子や対応方法 ○養護教諭の見立て
情報交換をして良かったこと	○生徒の悩みや本音を知ることができた ○生徒への対応の仕方を知ることができた ○生徒への対応方法を養護教諭と一緒に考え工夫した ○養護教諭と担任が同じ考えで生徒に接することができた ○生徒理解が深まった
情報交換する上の困難点	○保健室には常に生徒がいるため、保健室での情報交換ができなかったこと

4 考察

盛は、養護教諭は、一連の養護活動のプロセスの中で、子どもの健康問題の構造が見えてくると、専門的立場から、その子どもに必要と判断したことや願いが生じることを述べ、これを養護教諭の「専門的立場からのニーズ」と呼んでいる⁵⁾。教諭にも同様に、その子どもに必要と判断したことや願いが生じる。それぞれがその子どもに必要と判断したことや、願いをすり合わせていく過程がニーズの共通化といえる。今回、「情報共有により、教諭と養護教諭のニーズを共通化していくことで生徒の課題が共有され、生徒のより良い変容につながるのではないか」という仮説を立て、実践した。情報交換が教諭と養護教諭のニーズを共通化することにつながったかについて、考察する。

(1) 生徒の良いところや感性を担任等に伝えること

生徒の良い所や好きなことを伝えることで、担任等が生徒への声掛けや関わりを促すことにつながるケースが多かった。これは、短時間で情報交換をする際に「生徒の良い所を伝えること」が取り入れやすく、件数が多くなったためと考えられる。また、「良いところ」を伝えることで生徒理解が深まったり、情報交換に良いイメージを持ってほしいと思ったからである。結果、この点は、担任等の生徒理解を深め、担任から生徒に関わるきっかけとなった。また、生徒が精神的に不安定なとき、担任は声をかけて良いのかわからず関わりを躊躇することがある。情報交換をすることで、担任は生徒の本音や精神的に不安定となっている要因を知り、触れてもいい話題なのだとすることを認識するのではないかと考えられた。

生徒も、担任等が関わり、自分のことを認めてくれることで、安心した様子を見ることが多かった。先行研究より、「高校生の、先生との関係における、自己有用感を高める効果が強い教育的環境や関わり方」は、「先生はほめてほしいと思うことをほめてくれる」「先生の方から話しかけてくれる」「先生は話を聞いてほしい時に話を聞いてくれる」¹³⁾などがあげられている。今回の結果においても、担任等が生徒の頑張りやつらさを認めるなど、受容的に関わることで、生徒の自己有用感が高まったと考えられた。また、担任等の一言が生徒のよい反応を引き出すのは、担任が認めてくれることで、クラスからも認めてもらえるように感じ、クラスの中での自己有用感を高めることにつながったのではないかと考える。

(2) 養護教諭が自己開示すること

「わからない」が言えることが連携の第一歩であるが、「生徒の対応に困った時、他の教員に助けを求める方だと思う」の平均点は低く、教員は「生徒の課題や対応方法を知りたい」と思っているものの、「わからない」「困っている」となかなか言えないと思われる。同様に、養護教諭も専門的立場からの助言を期待されていると思うあまり、生徒のことがわからないとは言いづらく、自分自身で情報交換のハードルを高めている部分もある。養護教諭が自己開示したケースでは、担任等から生徒観を聞くことができ、養護教諭自身の生徒理解が深まり、連携のきっかけとなるものが多かった。自己開示し、担任等の生徒観などを聞いたとき、連携して取り組んでいけるのだという安心感を感じ、自身の気持ちが軽くなることも多かった。養護教諭の自己開示は、双方にとって有用なものであった。

(3) 養護教諭の生徒観を伝えること、生徒の本音をありのまま伝えること

生徒の表面に現れている反応だけでなく、なぜそうなるのかや、保健室での対応の意図について伝えることで、担任の生徒への関わり方が変わることも多かった。しかし、事前事後調査では「養護教諭と情報交換することで、それまでとは違うやり方で生徒への対応を試みた経験」については点数の変化がなかった。情報交換をした相手が主に担任と限られていたためと考えられ、養護教諭の生徒観を伝える機会を増やしていかなくてはならないと感じた。

(4) 7つの工夫のどれが、ニーズの共通化に直接結びつくのかまでは分析できなかった。アンケートに、「養護教諭と情報交換することにより、二人以上で共通した考えを生徒に伝えることができ、説得力のある話ができたと良かった」との記載があった。これはニーズを共通化させて生徒に接

したことにより、生徒の変容につながったと解釈される。生徒の変容まで見ることができたケースでは、様々な入り口（情報交換の工夫）から、担任と養護教諭が情報共有することで、それまで自分一人でとらえていた生徒の理解が多面的となり、お互いに新たな気づきを生む。そして、その生徒に何が必要なのか、どうなってほしいのか、教諭と養護教諭のニーズをすり合わせていくことができたと考える（図3）。

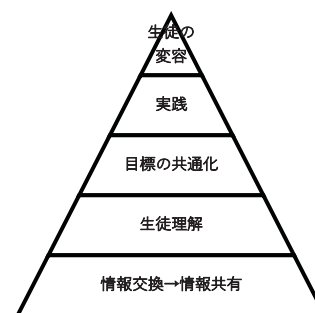


図3 情報交換の構造

5 おわりに

本研究での課題と今後の展望について述べる。

今回の実践では、担任等が情報交換したいときにタイムリーに情報交換できているかは分析できていない。アンケート調査では、「情報共有の場が整っていると思う」の平均点は他と比べ低く、多くの教員が「保健室には常に生徒がいるため、保健室での情報交換が困難だった」と記述していた。保健室は情報交換の場としても重要であるが、その役割を果たすことが困難だった。情報交換はしたいと思った時にできないと、後回しになることが多い。多くの保健室利用者がいる場合、担任の立場からタイムリーに情報交換をするにはどうすればいいのか、情報交換の場の工夫について考えたい。

教諭には、養護教諭から専門的な情報を得た経験、養護教諭の情報から生徒のイメージが変わった経験や、対応の方法を変えた経験等が不足していると推測される。職員研修や職員会議において、養護教諭の生徒観を伝えたり、対応方法を情報提供する必要もある。また、養護教諭が必要と思っている内容と、担任が必要と思っている内容にずれがあるのかもしれない。担任の視点からの情報交換のあり方について更に深めていきたい。

一人の生徒について、情報交換がどのように深まっていくのかを分析することができなかつた。また、どういった情報交換が効果的なのかを明らかにすることができなかつた。事例一つ一つを丁寧に分析することで、明らかにしていきたい。

今回の研究を通して、情報交換を意図的に行うことで、自分自身が先生方と情報や感情を共有でき、気持ちがる楽になる体験をした。また、生徒は担任に一番にわかってほしいということ強く感じ、生徒の課題解決のために教諭に働きかけることの大切さを実感した。

最後に、本研究を進めるにあたり、本校管理職はじめ多くの教職員、生徒のみなさんにご協力をいただきました。心から御礼申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 文部科学省(2017), 現代的健康課題を抱える子供たちへの支援—養護教諭の役割を中心として—, 1-2
- 2) 小倉学(1985), 改訂養護教諭—その専門性と機能—, 東山書房, 第10版, 223
- 3) 榎原育美他(2018), 養護教諭と担任の連携に関する文献的研究—Text Mining(KH Coder)を使った分析—, 看護学研究, 10, 19-27
- 4) 日本養護教諭教育学会(2012), 養護教諭の専門領域に関する用語の解説集(第二版), 11
- 5) 盛昭子(2008), 第3章養護活動の過程, 大谷尚子編, 養護学概論第5版, 東山書房, 44-54
- 6) 小林央美(2010), 質的研究の可能性と課題—質的研究の試みから見えてきたもの—, 日本学校保健学会第57回学会講演集 52 Suppl, 97-98
- 7) 森田裕子, 吉田俊和(2011), 教師間の連携を構成する要因の検討—養護教諭を対象とした面接調査から—, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, 58, 83-92
- 8) 栃木県総合教育センター(2013), 高めよう! 自己有用感—栃木の子ども達の現状と指導の在り方—, 1-11
- 9) 斎木真理子(2012), 高校生の健康な発達のための効果的な校内連携による支援についての研究—保健室経営計画の活用を通して—, 神奈川県立総合教育センター長期研究員研究報告 10, 61-66
- 10) 本田美和子, イヴ・ジネスト(2014), ユマニチュード入門, 医学書院, 124
- 11) 大石英史(2004), 学校現場における教員間の連携—子ども達の発達をどう支えていくか—, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第18号, 133-143,
- 12) 安藤清志(1986), 対人関係における自己開示の機能, 東京女子大学紀要論集, 36-2, 167-199
- 13) 栃木県総合教育センター(2013), 高めよう! 自己有用感—栃木の子ども達の現状と指導の在り方—, 33